

## 聴解力養成のための英語授業での試み

坂本季詩雄

### An Experiment to Improve Listening Competence in English Classes

Kishio SAKAMOTO

This paper includes the result of the whole year struggles for the two classes of English. The course objective was to improve English listening and note taking ability of the students. The course aimed at providing not only the listening competence but also the various trainings available for each of the students for their future necessity of other proficiencies in English.

I. 本論は、英語の授業でのリスニング力強化のための一年を通じての試みを、客観的尺度と、主観的尺度の両面を通じて評価することを目標に設定して行なったある授業の報告である。まずは授業の核となる使用教科書の内容と、編集方針を紹介する。

#### II. 教科書について

使用したテキストは英宝社出版の *A Guide to Taking Notes-Life in Britain and in America* である。一年間この教科書を使用した。タイトルにあるように taking notes を身につけることを目標としている。5つの章よりなる、英米の生活、文化に即した話題を提供している。各章はそれぞれ3~4のユニットにわかれている。

各ユニットでは一人のナレーターが語るメインテキストと、そのユニットの話題に即したダイアログが用意されている。学生はテキスト内容の録音されたテープを、前もって配布されている。テープの中では、イギリス英語とアメリカ英語で、両国の異なるアクセントや、語法、発音に慣れるようにという配慮がなされている。

話される速度は分速で前者が120~130語程度、後者はかなり速く、170~180語であった。メインテキストではスクリプトが教科書に掲載されていない。学生は耳で聴いた内容を理解するよう求められているからだ。話す速度は速いとは言えないが、内容はかなり深く、一般教養的知識を提供し、20才前後の学生の知的好奇心にたえうるよう意図されている。そのため内容理解に必要な語彙と背景知識は前もって教科書に示されている。それを手がかりに予習す

ることが求められている。

さらにこの教科書の特徴である、note taking を身につけるために、メインテキストの格子を各パラグラフごとに key word により提示し、学生が note をとる技術を身に付けられるようにガイドしている。さらにその後内容把握の成否を確かめるため、True or False Questions と英語による質問が、5~6問づつ用意されている。さらに内容をあらわす絵によるスライドが用意され、視覚面から内容理解を促そうとしていた。

視覚については次のようなことがいわれている。

「視覚的な刺激は記憶という点で強力である。...絵は連即したものや脈絡を思い出すのに特に有効である。」<sup>1</sup>

ダイアログでは、平易な内容であるが、速度の速い日常会話が用意されている。スクリプトが教科書に提示されていることもあり、学生は内容について簡単に理解できる。ダイアログのあと、簡単な exercise が数問あり内容の理解度を確認することになる。

このように教科書は、訳読により進める授業形態を打ち破ろうとし、また聴解力の向上を目指し、かなり苦心して作られている。

この教科書は従来の訳読による英語の授業法に、読解ではなく聴解という違う方面からのアプローチをしている点で、今後の英語教育のひとつの方向性を示している。

### III. 授業方法について

さてつぎに授業方法がこの教科書の目標を達成するに適していたかが、問題である。この教科書を使用するクラスは全てLL教室で行なわれた。このLL教室は13年程前に作られたものである。各学生の机に備えてあるものは、出欠確認用のスイッチとヘッドセットだけである。部屋にはビデオプロジェクターと、それと連動させることのできるテーブルデッキと、OHTVがあるだけの簡素なものである。最近のLL機器に比べればほとんどなにもないといった感がある。しかし実際に使いこなすには充分であったかも知れない。

授業中はいろいろな音声を学生に聴いてもらうため、音がもれないための防音やエアコンディションの設備や、授業進行に係の人の補助が得られ、最低限の環境は確保されていたといえる。ただ各学生の机にテーブルデッキが備えられていれば、もっと多様な音声面からの教育的アプローチを図れたことはあきらかである。

特にこの教科書は使用されて3年を経過しており、聴解力を養成するため、訳読を離れるためあってはいけないうまく、学生が入手可能であることにより、授業方法や指針に悪影響があったことはいない。

クラスサイズは1クラスは39人、もう一つは22人であった。しかし欠席したり、脱落したりで常時一割から2割ほどの学生数であった。毎時間45分間のテストをして、つぎの時間には採点して返すには、ほぼぎりぎりの数であった。

前期にとられた授業方法は、3年前に確立された方法であった。つまり各章を、90分を一時間とし、ユニット数+2時間で終えるというパターンである。ユニットが3つある章は5時間をひと区切りとすることになる。あとの2時間のうちわけは、1時間を各章の内容に関連するビデオ教材を40~50分見ることにあて、あと一時間は各章の内容についてのテストを50分ほど行なうというものであった。余った時間は各担当教員が独自の教材を用いて授業を行なうことになっていた。

ビデオ教材については、既に教科書において、ある程度の予備知識を持っているとはいえ、学生が一度見て充分理解することは、ナレーションの速度から見ても不可能なものであった。さらに見たあとで、なんら内容についてのチェックが用意されていないので、学生はよく分かりもしないものを無目的に見

せられているという印象をもったようだ。また部屋を暗くせずにはビデオプロジェクターは使用できないので、場面を見ながらのnote takingもできず、居眠りする学生があとをたまたなかつたのも仕方ないように思われた。上にあげた5時間のうち2時間は聴解力を養成するには効率的な授業形態とはなりにくいように思われた。

前期授業における問題点は、週一回、90分しか行なわれない授業において聴解力を少しでも養い、より高度なnote takingの能力をつけるというためには、聴き、そこから得た情報にもとづいて作業をする時間が教室内では短く、学生が自習するよう仕向ける拘束力がない点である。それは後に示すアンケート結果からも分かる。様々な点を反省し後期授業にのぞむことにした。

後期授業は長期の休暇によって持続的な学習を妨げられない9月下旬から、12月下旬までの三カ月をあてた。先ずこの授業による聴解力が伸長したかどうかを測定するために、TOEFLのリスニングのパートの問題50問を、夏休み前の最終授業時に行なった。

そのときの成績はつぎのようであった。

クラス	A	B
受験者数	38	16
平均点	18.6	18.1
最高点	30	42
最低点	9	11

夏休みには60分の録音済テープを一本ずつ渡し、英語による350語前後からなるストーリーを、日本語におこしてくることを義務づけた。テープは市販のテープ教材で、英語を漢文のような返り読み(聴き)をせずに理解できるよう工夫されたものであった。先ず最初に英語を文節ごとにくぎり、そのたびごとに聴いた部分の日本語訳がながれてくるパターンで一通りストーリーを聴いた後、日本語の部分が抜け落ちてポーズだけ入ったパターンで、先のストーリーをきく。そして最後に英語がよどみなく流れてくるテープをきく、という3つのパターンにより構成されていた。

毎回の授業は、テストに45分かき、残りは次の時間のテスト範囲になっているユニットを教科書以外のワークシートを用意して、それをクラス全員でこなしながら理解するように指導した。

このワークシートの役割は、2つであった。ひとつは、予習の段階での、知識の掘り起こしと、獲得

である。それは schema と呼ばれる、認知活動の基本的ベースである記憶の、掘り起こし作業である。

「スキーマは認知活動の基本的なベースになるものであり、人間のあらゆる情報プロセスが依存するものである。スキーマは記憶の基本的な単位であるばかりでなく、知覚データの解釈（言語的なもの、非言語的なもの両方を含む）、記憶からの情報検索、行動の組織化、目的決定、認知機構、中でのプロセスの流れの誘導、などあらゆる認知活動に関与する。」<sup>2</sup>

もうひとつは、できる限り学生各人がメインテキスト内容を明確に把握できる材料を提供することである。それはあくまでも与えられるものではなく、個人が積極的に働きかけ理解することを目標とした。質問の答えをみつけだし、自分なりにストーリーを再構築するできるよう、教員は少しずつ手助けするといったイメージの授業である。従って一つの問いに完全な答えが得られなかった場合も、ヒントをだすだけにとどめ、学生の自主的な学習を促した。わざと短い制限時間を設定し、その中でいやおうなく、学生は積極的にまわりのほかの学生から情報を得よう仕向けたりもした。

こういった状況の中、指導は全て英語を用いた。学生同志の会話もできる限り英語を用いることをクラス全体の約束事にした。自然に、日常生活で、英語に遭遇する状況と、クラス内の状況とはまるで異質である。しかし積極的に接する時間が長ければ長いほど、コミュニケーション能力は高くなる。20歳前後で既に英語の基礎知識をかなり持った学生は、英語修得の素地を幼い子供達に負けず、或はそれより勝った能力を保持しているのである。<sup>3</sup>

4月の段階でのアンケートでは、学生の英語を話すことへの要求はかなり強いものがあつた。また語学を学ぶものにとって、その言葉を話せるようになりたいと願うのは万国共通の現象であるからである。はじめは抵抗があつたものの、しだいに英語で意志を疎通しあうことの楽しさを理解し、教員に指名されたとき以外も学生同志で英語を使うようになっていった。学生のこの件に関する意識は、以下のアンケートでもとりあげている。

ここで Second Language Competence について資料をあげておく。

Second Language Competence とは、その言語に対応する文化的状況の中のあらゆるコミュニケーションの要求に見合うように、第二言語

を正確に、流暢に、そして適切に理解しかつ使うことのできる第二言語の知識である。

第二言語能力は3つのタイプの能力、つまり原語能力 (linguistic competence)、伝達能力 (communicative competence)、文化的能力 (cultural competence) からできている。言語は一つの文化的枠組のなかで、伝達するために使われる。<sup>4</sup>

ここでは第二言語能力を修得するには、様々の知識を応用しなければならない、と示唆している。

#### IV. 教材について

つぎに毎回行なったテストの出題形式をあげながら、学生に何を期待したかを示す。常にこのような形式の45分間テストをおこなつた。回数は後期授業での範囲に相当する7つのユニットに対して7回であつた。メインテキスト、とダイアログに対して以下のような問題を、学生はそれぞれ2~3回づつテープを聞きながら、解答していくように指導していた。

Explain what each of the underlined expressions refer to in context. An example is given.

Example “One of the most delightful...  
(a custom of British people)”

上の問題に答えるためには、一センテンスごとのつながりを的確に把握することが重要である。特に主語や目的語など、内容把握に重要と思われるものを選び出題した。

For each of the following excerpts taken from the main text 1, write the missing word(s) and circle the letter corresponding to the expression that best explains its meaning in context.

1. “The ( ) amount of tea leaves, Indian or...”

- a. necessary
- b. exact

括弧内に聴き取つた言葉を各問題である。下の a, b の選択肢は括弧に入れた語と同義語を選ぶようにしてある。日頃から英英辞典を使うことを勧めていたのだが、テストによる動機づけとなることを願つた。

コンテキスト中の単語は単独で与えられた語より

も、聴きとり結果は20～40%よくなる、という研究がある。<sup>5</sup>つまり自分の既に持っている知識(internal knowledge)と新しく獲得した、または獲得しようとしている知識(external knowledge)は常に結び付けられて、記憶され、修得される。この問題は、その点を特に開発することを意図して作成した。

For each of the following excerpts taken from the main text 1, write the missing word(s) and circle the letter corresponding to the expression that best explains its meaning in context.

Q 3 : (How long does it take to the station?)

A 3 : About an hour.

上の問題は、テキスト中の内容についての質疑応答をさせる問題である。通常と異なる点は、answerを前もって与えておく点である。つまり答えを得るための確かな疑問文、(括弧の中の文)を作することを要求した。answerはなるべく曖昧な形で用意することを心がけた。例えば数字、135やMaryだけである。なぜなら主語動詞のある文であれば、簡単に疑問文の形が分かってしまうこと。そして答えがあいまいであればあるだけ、学生は想像力を使う必要が生まれる。この点は学生にとっては、日本の教育事情の元では、あまり発達させようがなかった点である。さらにテープから流れてくる情報のどれを的確にとらえるべきかと注意を払い聴くよう促すことが可能になる。

Circle T or F to indicate whether each of the following statements is true or false based on the main text. If a statement is false, underline the incorrect portion and rewrite it to make it true in the space bellow.

T F 1. Mother is always trying to take care of her furniture and ornamnts.

これは通常の T & F Questions である。異なるのは間違いとしたときには、どこがどのようにテキスト内容と異なるのかを指摘しなければならない点である。受身でテープを聴くのではなく、積極的に問題点をとらえる聴きかたを身につけるよう期待した。

Summarize Dialogue 2 in less than 3 sentences.

この問題は文章の数に制限を与えて、内容を自由

に表現させることを目標にした。テキストにスクリプトのあるダイアログをこの問題の対象とした。ダイアログはスクリプトが与えられているので、学生はどうしても聴解ではなく、読解をしてしまう。そこで自分でストーリーを再構築する訓練を試みた。文章を読解するときにも用いているが、リスニングや、note takingをする上で大切なのはこの能力である。自分の意見を自分の表現法であらわすことは、日本の英語教育において定番になっている、他人の語することを、指定された表現方法であらわす英作文とはまるで違い、積極的な活動である。文章の数の制限は、添削する上では教員の負担を軽減することにつながる。しかしそれ以上に3つの文章しか使えないので、内容を良く理解して、なおかつ表現方法に工夫をこらす必要が生じる。そのことでより細かいニュアンスをあらわす、仮定法や、分詞構文、完了形、動名詞句、前置詞句などを意識的に使うようになった。

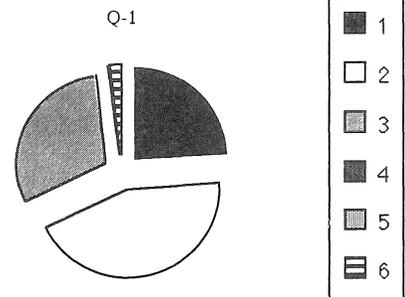
このテスト、あるいは連動している授業で最も強調したのは、出来るだけ想像力をはたらかせることである。教室内で、外国語を学ぶと言う特殊な状況下で、日本人学生の最も欠けていて、最も必要とされる点の一つであろう。

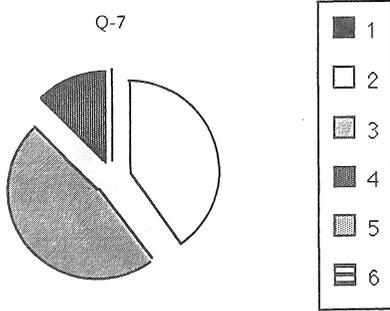
#### V. 主観的評価の分析

このような授業形態の中で学生がどのように反応したかを少しでも理解するために最終授業で、無記名によりアンケートを試みた。前後期の違いを比べている場合、特に指摘しないかぎり、上の表が前期授業への評価を示し、下が後期のものを示している。

1. 前、後期、毎授業時前後にテープを何度聞きましたか。

0回	1~2	3~5	6~10	11~
1	2	3	4	5

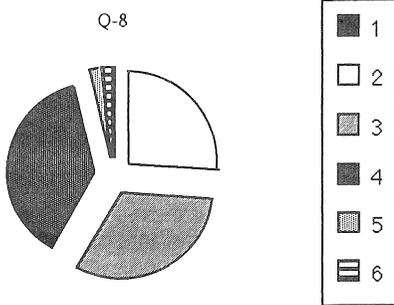
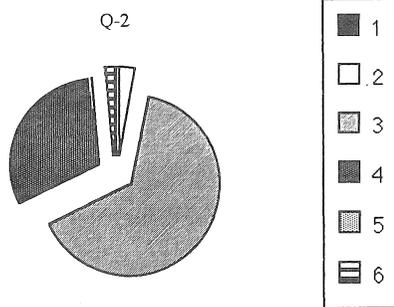




上が前期, 下が後期授業に備えて, テープを聴いた頻度をそれぞれ示している。前期は一度も聴かなかったものが, 1/4, 全体の70%が2回以下しか聴かなかったことがわかる。一方後期は聴かなかった者がいなくなり, 3~10回聴く者の割合は55%に増えている。授業方法により学生の態度も随分変わるものである。

2. 前, 後期の授業方法をどう評価しますか。

very bad    bad    so so    good    very good  
1            2            3            4            5

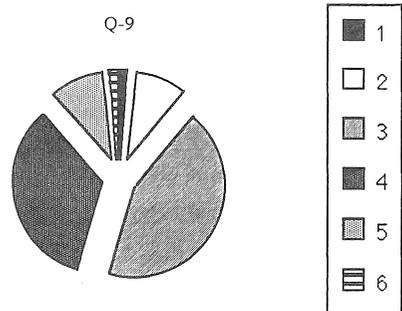
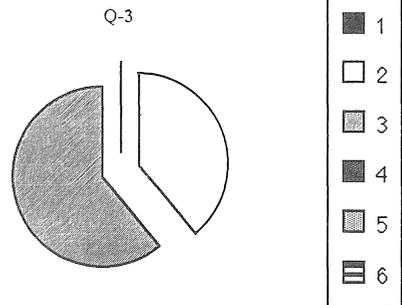


授業方法について学生の意識はいかなるものであったろうか。前期は so so + good と答えた学生は 95%を占めている。後期は bad の割合の増加が目立つ。しかし同時に good も増え, very good もあらわれた。後期は, かなり厳しい授業になったが, 実力がつくという積極的な考え方をする学生が増えたといえそうである。

3. 前, 後期, ヒアリングを中心とした総合的な英

語力の向上をはかるという目標を理解できる授業方法でしたか。

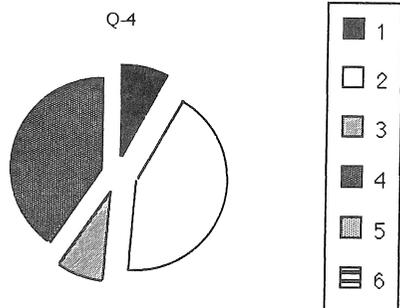
not at all    little    so so    much    very much  
1            2            3            4            5



授業の目標達成には, 目標についての理解が欠かせない。前期と後期で学生の意識ははっきりと変化したことが明かである。前期は so so + little が100%であったし, 後期は much + very much が高率で増加した。目標に対するより明確な認識ができてきたことを証明している。

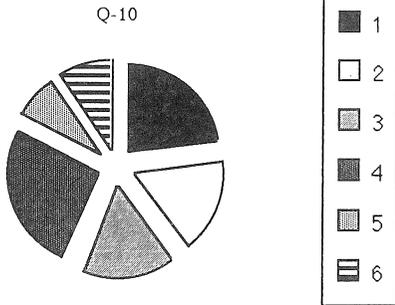
4. 前期授業の方法のどの点を一番評価しますか。

1. 予習がいらぬ
  2. 授業中集中できる
  3. 常に授業に参加できる実感がした
  4. ヒアリングをふくめた英語力が向上する。
  5. テストが少ない
- その他 ( )



5. 後期授業の方法のどの点を一番評価しますか。

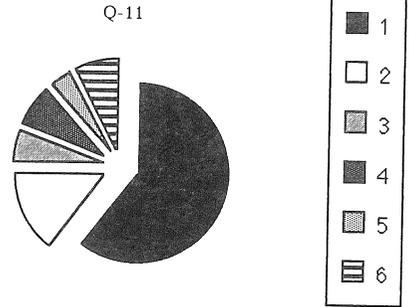
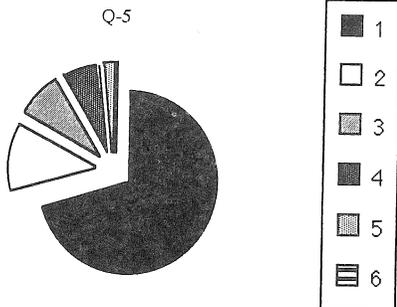
1. 予習がいない
2. 授業中集中できる
3. 常に授業に参加できる実感がした
4. ヒアリングをふくめた英語力が向上する。
5. テストが多い
- その他 ( )



前後期の授業への学生の評価を概略してみる。前期はテストの少なさをよしとする学生が少ない点が興味を引く。そして後期ではテストの多いことを評価する学生の存在には驚かされる。大学での英語教育のなかで、真剣に取り組もうという学生の存在は光明である。

6. 前, 後期の授業で実感したことをひとつあげなさい。

1. ヒアリング力の向上
2. ヒアリング力+リーディング力の向上
3. ヒアリング力+単語力の向上
4. ヒアリング力+リーディング力+単語力の向上
5. ヒアリング力+リーディング力+単語力の向上+英語で発表する能力(話す, 聞く)の向上
6. その他



前後期とも大きな差はみられない。ヒヤリング力の向上を実感しているようである。リーディング力が向上したと答えた学生が若干ふえているのがめをひく。

日本人の英語は一般的に発音が不自然である場合が多い。その問題点は大きいものから順に、イントネーション, リズム, 単音発音であると指摘されている。それは、英語が Stress-timed 言語であり、日本語が Syllable-timed 言語であることに起因している。日本人が英語を読むと、アクセントに伴う母音の変形, 短縮ができず、ぎくしゃくした読みかたになる。その結果スムーズに読めないのが、当然読むスピードも遅くなるのである。<sup>6</sup>

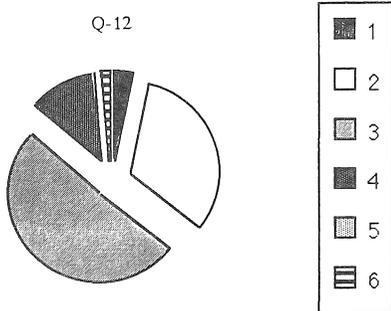
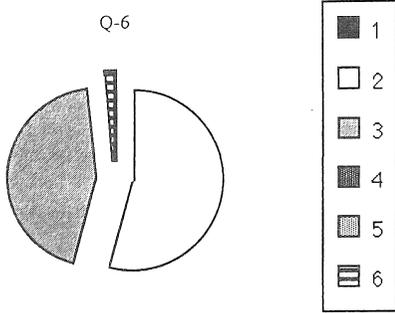
上の点を補完するために授業中に、CNNやVOAニュースを意味を考えずに、ただ repeating の訓練をたびたびさせていた。特にこの訓練中にはヘッドフォンをつうじて各学生をモニターしてみると、慣れるにつれて上であげた3つの要素、イントネーション, リズム, 単音発音がよくなっているのに気づく。英語のリズムに慣れると、意味的に重要な語彙だけをすくい取るように読めるようになる。あるいは一定のリズムをとりながら読むと効果があるといえるかも知れない。英語の reading と listening には、日本人に特有の障害があると思われる。それがイントネーション, リズム, 単音発音と分類されているのだ。

発音と聴きとり能力の間には相関関係があるとの指摘がある。よく聴きとれる人は発音が明瞭であるし、なまりも少ない。<sup>7</sup>

以上のことから listening 能力を養うためには、reading, とくに repeating のような、イントネーション, リズム, 単音発音が同時に含まれる訓練が有効であろう。

7. 前, 後期授業で英語力がつきましたか。

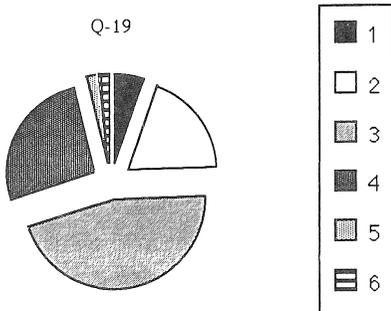
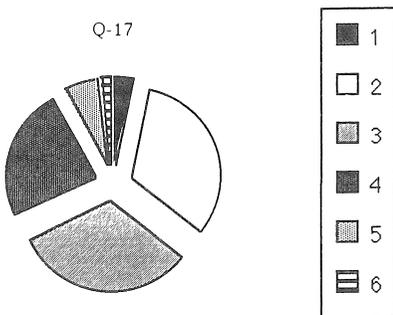
not at all    little    so so    much    very much  
1            2            3            4            5



前期は little+so so と答えたものが大多数を占めていた。後期では little と答えたものは約半分になった。その他 much と答えたものも出てきた。目標理解の程度に比例しているようである。

8. 前, 後期, Taking notes の重要性を理解できましたか。

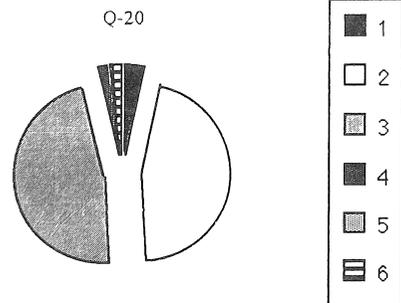
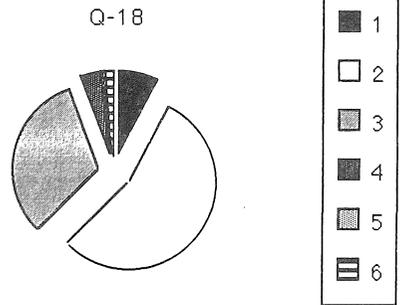
not at all    little    so so    much    very much  
1            2            3            4            5



note taking の重要性の理解にはそれほど目立つ違いは見られない。しかし後期を見ると so so の率が増加し、全体として重要性の理解へ傾いてきたのがわかる。

9. 前, 後期, Taking notes ができるようになりましたか。

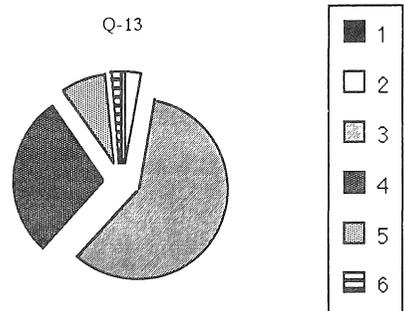
not at all    little    so so    much    very much  
1            2            3            4            5



後期は so so と答えたものが 10% 増え、全体では前期に比べ note taking の力が少し身についたと考えているようだ。

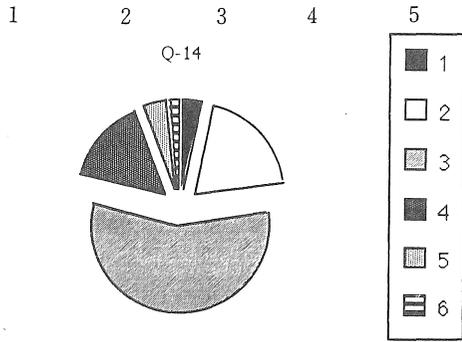
10. 夏休みの課題について、量はどうか。

too little    little    so so    much    very much



so so と答えたものは半数以上にのぼるが、much, very much と答えた者もまた高率である。下の事項をあわせると、宿題は嫌いだとのあらわれと読むことができよう。

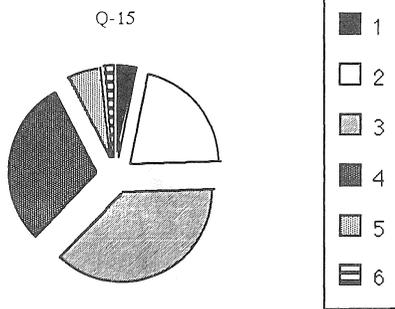
11. 夏休みの課題について、難易度はどうか。  
too difficult    difficult    so so    easy    very easy



70%はテープの難易度を高いとは考えていない。

12. 夏休みの課題について、ヒアリングの訓練になりましたか。

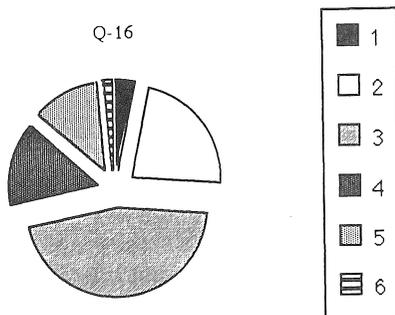
not at all 1 little 2 so so 3 much 4 very much 5



70%がこのテープの効用を認めたようである。返り読みをしないことがテープを聴くときには特に重要である。このことを生徒が理解したことで、後期授業が進めやすくなった。

13. 夏休みの課題について、訳読ではなく書かれたままの順序で英文を理解する助けとなりましたか。

not at all 1 little 2 so so 3 much 4 very much 5



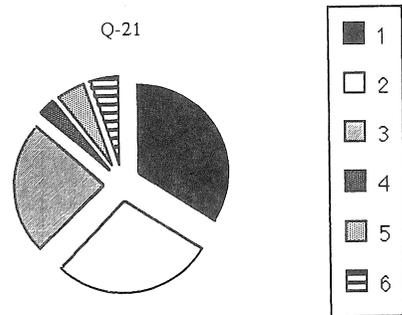
上でみたとおりの意識の変化がここからもうかがえる。このテープ教材の大きな特徴は、英語と日本語の違いが巧に利用されていることであろう。第二言

語学習者は母語を媒介にせずに思考できない。しかし目標言語と母語との違いが明確になればそれに応じた学び方をするようになる。それは母語をみにつけた過程で、様々の失敗の経験を、第二言語学修得に応用できるからである。

14. テキストのどのような点が良かったですか。

1. 外国の風俗文化の理解に役立つ。
2. Note taking の重要性が分かる。
3. Note taking の方法が身につく。
4. スライドの視覚情報がある。
5. ヒアリング力の向上が求められている。

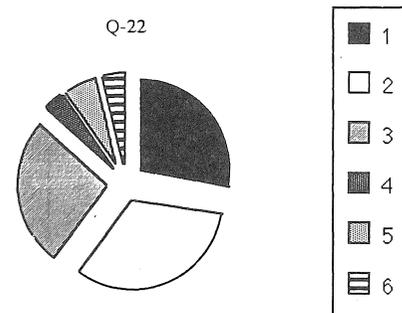
その他



テキスト作りの指針としたことが、生徒にもはっきりとつたわっているようである。

15. テキストを理解するためテープを文字におこしましたか。

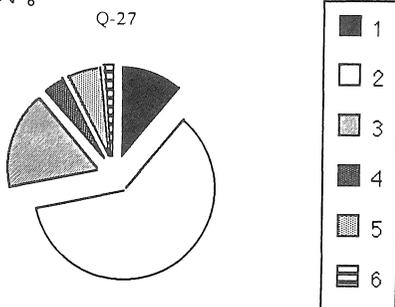
- 1 自分でおこした。
- 2 人のおこしたコピーを使った。
- 3 テキストやプリントがあったので必要なかった。
- 4 内容が簡単なので必要なかった。
- 5 話す速度がゆっくりなので必要なかった。



60%が文字におこしたものを使用したことがわかる。しかし聴解をこころがけた学生が35%いることは授業目標の理解度と相関があるようだ。

16. 後期の授業をどう思いますか。

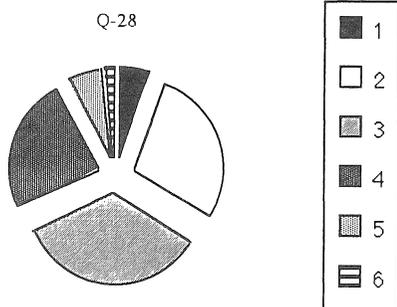
1. しんどいだけ。
2. しんどいが身につく。
3. 授業がわからない。
4. おもしろくない。
5. 楽しい。



しんどいが身につく、と答えた学生は60%を占め英語を身に付けたいという意識があらわれている。

17. 後期のような授業を後輩にとるよう勧めますか。

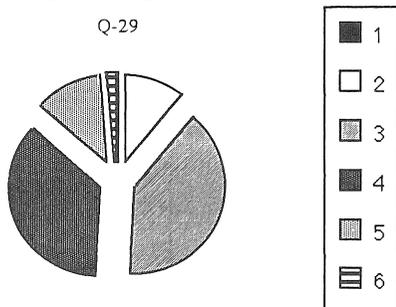
not at all    little    so so    much    very much  
1            2            3            4            5



70%が後期のような形態の授業をとることを勧めると答えた。後期の初めには、共通の教科書を使用しているほかのクラスとの比較して、厳しすぎると苦情が出たことを思うと、むくわれたような気持ちがする。

18. 英語の要約は能力向上の訓練になりましたか。

not at all    little    so so    much    very much  
1            2            3            4            5



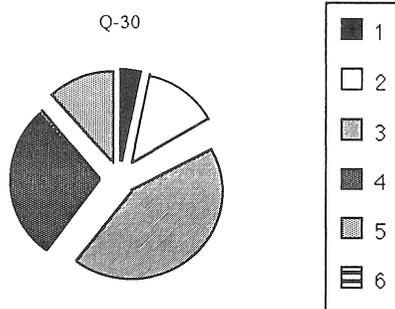
ここでは要約が役にたつと自覚した生徒が大半を占めた。ねらい通りの結果であったが、これを40~50人のサイズのいくつかのクラスでおこなうのは不可能である。一クラスの平均が20~25人ぐらいならでける可能性もあると思われる。施設の良し悪しよりもクラスサイズは切実な問題である。

「授業がなし得ることは、学習者が学習した分析知識への制御力を増すことである。すなわち、訓練によって、この知識を自動的に運用できるようにすることである。」<sup>8</sup>

この力を付けるにも要約は有効であると思われる。

19. 英語を聞く時、音だけでなく既にもっている常識などの知識を使うよう心がけるようになりましたか。

not at all    little    so so    much    very much  
1            2            3            4            5



授業の目標であった、想像力をたくましくし、積極的に教材へ働きかけるといことができるようになったことを示している。83%が積極的になる心がけを、大切であると考えたことは、それ自体この授業の目標が達成されたといえるだろう。

## VI. 客観的評価

以上のような授業を行なった結果を、客観的に示すことができなければ、厳しい授業をするために、学生と同様に教員も努力したこともぬか喜びに終る。

つぎにしめすのは最終授業時に行なった TOEFL リスニングパート50問の結果である。

クラス	A		B	
	7月	12月	7月	12月
受験時期	7月	12月	7月	12月
受験者数	38	35	16	17
平均点	18.6	20	18	18.5
最高点	30	33	42	42
最低点	9	8	11	11

上の結果を PAIRED T TEST にかけて7月の成績と12月のものに有意な差があるかをしらべた。

Part	T値	有意差
I	0.024	*
II	0.3051	
III	0.1155	
Total	0.0075	**

PartとはTOEFL, Listening partのなかで3つのPartに分かれていて, その有意差も個別にとってみた。

上の表から分かることは, Totalは前後期で有意差が\*\*の精度で確認できることである。つまり前期よりも後期の方がリスニング能力が向上したことを示している。

#### VIII. まとめ

かなり厳しい授業を三ヶ月にわたりおこなった。学生がついてくるか心配な面もあったが, 毎回教材をそろえ, 予定表を作り授業を進めると言う, 教える側にとってもきつい期間だった。成績評価テストを前後にすることにしていたので, 一時間と言えどむだにできない, あるいは失敗できない, というプレッシャーは学生同様つらいものであった。しかし教えている間に学生の態度にも積極性が見られるようになり, クラスは活発になるのがわかった。自分のもてるものを全てだして, 学生の気持に対抗し, 最終的に彼らも私もある程度満足のいく結果が得られたように思う。

本論文は愛知工業大学計算センターの職員の皆様, 特に山本久雄氏, 近藤修司氏, 岡崎学園国際短期大学の亀井節子先生の指導と助言のもとに完成することができた。ここであらためて各氏に心から感謝いたします。

#### 注

1 Hector Hammerly, *An Integrated Theory of Language Teaching and Its Practical Conse-*

*quences*, Vol. II, *The Series in Linguistics* trans. Toshihiko Yamaoka 山岡 俊比古 (『第2言語教授, 実践統合理論を求めて』), (東京: New Currents International, 1988), p.104

2 谷口賢一郎, 『英語のニューリーディング』 (東京: 大修館書店, 1992), p.14

3 Hammerly, p.131.

4 Hammerly, p.67.

5 竹蓋 幸生『日本人英語の科学—その現状と明日への展望—』(東京: 研究社出版, 1981), p.90—91.

6 竹蓋 幸生, p.63-94参照.

7 竹蓋 幸生, p.89.

8 Rod Ellis, *Understanding Second Lnguage Acquisition*, trans Kokichi Makino 牧野高吉(『第2言語修得の基礎』)(東京: New Currents International, 1988), p.232.